

成長していく人々の姿を見るのが励み

今、母子保健の状況が最も劣悪な国の一つがアフガニスタンだ。妊産婦死亡率10万出生当たり1600という数字は世界で最高レベルにある。これは、女性が一人で外出できないなどの社会的なしきたりやインフラの未整備などのために医療サービスへのアクセスが困難であること、長期にわたる紛争で医療施設や医療従事者の数・技術が不足していることなど、さまざまな要因が重なっている。この課題に取り組むため、JICAから派遣されたのが、復興カンボジアで母子保健分野の人材育成に努めた経験を持つ藤田則子さんだ。



国際協力との出会い

「私なんて国際協力にかかわり始めて10年もたっていないからまだまだひよっこですよ」と笑う藤田則子さんが最初にJICA A専門家としてカンボジアに赴任したのは1998年のこと。

日本では14年間、産婦人科医として病院で働いていた彼女は、偶然再会した小児科医の同級生が国際保健の勉強のため大学院に進学することを知った。「なるほど、そんな世界もあるのか」と

思いましたね。同級生と一緒にNGOの報告会や勉強会に参加するにつれ、医療協力に携わる知り合いも増えていった。彼らの多くは、大学で勉強して途上で働いて、また勉強して、というのを繰り返していたので、私もまずは勉強してみることにしました。

97年3月、病院を退職した藤田さんは、タイのマヒドン大学に留学し、熱帯医学と公衆衛生学を学んだ。卒業後、タイとミャンマーの国境でNGOの医療ボランティアに携わってから帰国。どうしようかと考えていた

ときに、知り合いからカンボジアでの仕事の話を聞く。それがJICAの「母子保健プロジェクト」だった。

激しい内戦を経験したカンボジアでは、医師を含む「先生」と呼ばれる人々が大量に虐殺され、極度の人材不足に陥っていた。日本は母子保健分野で人材を育成し、医療サービスを改善するため、中核的な病院および人材育成組織として国立母子保健センターの設立を支援し、その機能強化を図るプロジェクトを95年に開始。日本からプロジェクトを統括するチーフアドバイザーをはじめ5人の専門家が派遣された。

答えられなくて患者さんに聞くんですよ。熱があるのかと問うと、また患者さんに聞く。この人お医者さんじゃないの？みたいな(笑)。

そのほか、点滴の薬の濃度の割合が理解できなかったり、体温の変化をグラフで示すように言っても縦軸と横軸が分からない。先生が殺されて十分な教育が受けられなかったと聞いていたが、それが現実にもどういふことなのかを実感した。「でも彼らが悪いわけではありません。不幸にも教えてくれる人がいなくなったから、次の世代にきちんと教えることができない。次世代の人材を育てるための教育制度の重要性がよく分かりました」。



カンボジアの地方の診療所や病院を視察する藤田さん。「母子保健プロジェクト」では、内戦で失われた人材を育てるため、全国の助産師や医師の技術向上を図る研修を行うシステムを構築した

藤田さんの役割は、産婦人科の技術指導と人材育成の仕組みづくり。「でもそついわれても最初はびんこなかつたし、毎日が驚きの連続でした。赴任初日、病棟と一緒に回っていたカンボジア人の医師に患者さんの病気を尋ねると、

「でもそついわれても最初はびんこなかつたし、毎日が驚きの連続でした。赴任初日、病棟と一緒に回っていたカンボジア人の医師に患者さんの病気を尋ねると、」



Fujita Noriko

JICA 専門家 藤田 則子

挑戦者たち
Stories of
Challengers
Vol.15



日本が支援したマラライ産科病院の未熟児用保育器。2003年、藤田さんはもう一人の専門家とともに、マラライ産科病院の運営機能の強化に乗り出した

門家になったときと同様、最初はとうすればいいか戸惑いましたが、ほかの専門家の方たちがベテランだったので、支えてもらいながら、試行錯誤して何とかやっています。

特にフェーズ2は、日本人がいなくてもセンターが病院・研修機関として機能していけるよう、「自立」を促進しなければなりません。そのためにはセンターのスタッフが育成される

費徴収制度を導入し、患者から適正な診療費を徴収して病院自身で財源を確保することで運営していくための体制を整えた。そして、医療サービスの質を高めるため、全国の助産師や医師の技術向上を図る研修を継続的に行うシステムを構築した。

さらにこの機能を強化し、かつ地方の病院のサービスを改善するため、2000年からフェーズ2がスタート。藤田さんはチーフアドバイザーに抜擢される。

「なんで自分になったのか分からないんですよ（笑）。初めて専

門家になったときと同様、最初はとうすればいいか戸惑いましたが、ほかの専門家の方たちがベテランだったので、支えてもらいながら、試行錯誤して何とかやっています。

る。その姿を見て「ああ、人ってこんなに変わるんだ」と思いました。センターの「離陸」に向けて希望が見えた瞬間だった。

カンボジアの経験がアフガニスタンで生きる

カンボジアでの経験は、藤田さんに国際協力の仕事への意欲をさらに高めると同時に、自分に足りない部分も気付かせてくれた。「勉強と仕事を繰り返す人の気持ちが変わったというのか、私も勉強して足りないものを補いたい」と思っていました。

しかし、そのころ世界は激動していた。9・11をきっかけに、アフガニスタンではタリバン政権が崩壊し、23年間続いた紛争に終止符が打たれる。復興へ向かい始めた同国で、日本を含め各国が支援に乗り出す中、劣悪な母子保健状況の改善を日本が支援するという話が藤田さんの耳に入る。そして、カンボジアから日本に戻った彼女に新たな任務が託された。

「最初の1年間は、アフガニスタンの状況が不安定だったこともあって、東京と現地を行き来しながら、できる支援は何でも

していました。プロジェクトの立ち上げも視野にありましたが、それ以前にやるべきことが山ほどありました」

高い妊産婦死亡率の低下は国の目標となったが、そのための医療施設も人材も足りない。そもそも重要である保健省（05年に公衆衛生省に改編）にその舵を取る部署がない。しかも多くのドナーが援助をしていますが、ドナー間の調整ができていなかったため、ばらばらに援助が持ち込まれ、効果的に機能していなかった。藤田さんは保健省に担当部署の設置を働きかけると同時に、もう一人の助産師の専門家とともに、カブール市にある最大の産科病院、マラライ産科病院の運営機能の強化に取り組み始めた。

「カンボジアもそうでしたが、長い戦争を生き抜いてきた医師たちは、患者を診る確かな能力を持っています。しかし、病院の運営管理や人材育成のシステムが崩壊していたので、立て直すために中核となる組織が必要でした」

マラライ産科病院でもドナーの援助が入り乱れていたため、まず援助を適切に受け入れられ

るよう窓口を一つにし、病院とドナーの間で支援してほしいものを、支援したいものを調整する仕組みをつくった。「アフガン人は能力が高いので、『交通整理』のお手伝いさえしてあげれば、自分たちで必要なものを取捨選択できた」という。

そして04年11月、保健省にリプロダクティブ・ヘルス部が設置され、9月にJICAは「リプロダクティブ・ヘルスプロジェクト」を開始。プロジェクトの目的は、リプロダクティブ・ヘルスにかかわる中央・地方の行政官や医師・助産師の能力向上と、マラライ産科病院を拠点とした医療従事者の研修システムの構築だ。藤田さんはプロジェクトのチーフアドバイザーを務めると同時に、公衆衛生省のテクニカル・オフィサーとして、リプロダクティブ・ヘルス部の機能強化や政策促進をサポートしている。しかし、リプロダクティブ・



カブール州のヘルスセンター（医療施設）のセンター長を対象に「リプロダクティブ・ヘルスプロジェクト」について説明する藤田さん

ヘルスの向上は、医療サービスの改善だけで達成できるものではない。「女性の教育普及や社会的な地位向上と合わせて取り組まなければなりません。10年や20年で成果が見えるものではなく、長期的な視野でこのことやっていくことが必要」と強調す

うな苦勞を乗り越えてきたカンボジア人からその経験を聞くことで、10年後の自分たちの姿を思い描くことができ、希望になっっているようです。また、カンボジア人も、これまでは教わる立場だったのに、ほかの国の人

が学びに来てくれたことです。私は、同じようにカンボジアからたくさんのお話を学ばせてもらい、そのおかげでアフガニスタンでできることも多いんです。育ててくれたカンボジアの人たちにいつか恩返しをしたいですね」



藤田さんが政策アドバイザーを務める、公衆衛生省の「リプロダクティブ・ヘルス、母子の健康」を担当するナデラ・ハイアット・フルハニ副大臣。「医療人材の不足が課題だが、特に女性の医療スタッフの育成が急務。JICAの直接的な協力はとても重要だ。アフガニスタンの一人の母親として、また一人の医師として、日本の支援に感謝している」

本当はがっかりすることのほうが多い。だから余計にうれしさを一生懸命探すんでしょね

Fujita Noriko

ふじた・のりこ アフガニスタン「リプロダクティブ・ヘルスプロジェクト」チーフアドバイザー。1958年愛媛県出身。83年東京医科歯科大学卒業後、産婦人科医として病院に勤務。97～98年タイのマヒドン大学に留学。98年10月～2000年3月「母子保健プロジェクトフェーズ1」の専門家としてカンボジアに赴任。同年7月～02年12月、カンボジア「母子保健プロジェクトフェーズ2」チーフアドバイザー。03年4月からアフガニスタンのリプロダクティブ・ヘルスの向上に尽力している。